

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成16年
10月号

毎月23日発行
通巻410号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成16年10月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



熊野の七里御浜にて(三重県)、台風の花 奈良市 和田 保さん 撮影

2003 (平成15) 年10月18~19日

賑栄い塾の記憶 (下) ~いのちのつながりを考える~

於：大倭紫陽花邑

出口三平

出口三平の話から

何を話すか 私は、明後日で、大本に入って三十年ということになります。大本にたどり着くまでと、大本という場で何を学んだかということ、それと、大本の核である出口王仁三郎(おにきさぶろ)という方の話をしたいと思います。

虚無的な世界に 今もそんな子供が多いと思うのですが、私は、なんで人間生きていくのだろうか?というような思いが、小学校に行く前あたりからありました。一種の脅迫観念ともなつて、眠れなくなることもありました。"とうちゃんも、かあちゃんも、死んだらみな消える"と思えてくる。怖くてしょうがない。

大人になったらわかるだろう……というところで凌いだものの、大人になりかけの高校時代になつて考えても、わからない。死後、無に帰するのなら、生きていく価値もないのではないか、などの葛藤のなかで、神経が震えているだけの自分とつき合うことになっていました。

哲学をしたら私の抱えている問題に解決があるかもしれないと、九州の佐賀から、京都の大学に進んだのです。

その当時は、学園紛争の時代でした。三回生の時(一九六九年)の冬、大学の時計台などから火炎瓶が投げられているのを、校舎の屋上から、私は精神的に加われないままに、見ているわけです。哲学でも実感が無い、歴史社会にも実感が無い。

大本との出会い そのような時に、私は、『大地の母』（出口和明著 毎日新聞社刊）という本に出会ったのです。その本は、大本という教団の草創期を描いている小説でした。大本は明治二十五年（一八九二年）に丹波に生まれた宗教ですが、いわば神懸りの集団ですね。

こんな神懸りの集団があるのだ、という事実そのものに、まずは、アホな驚きですが、驚いた。それまでは、霊的現象はわからないままに、宗教哲学の本など勉強してきたわけです。霊的現象などは、勉強することもなかったし、そんな世界があるということも、信じることは出来なかった。それが、『大地の母』には、いろんな神懸り現象が描かれていて、びっくりしましたし、そうか、こんな世界があったのか……と目から鱗が落ちる感じでした。

大本には、「良（うしとら）の金神」という神霊がでてきて、出口直という初老のご婦人に神懸りし、「今の世は悪魔の世になつているので、立替え立直す。その為に神が出てくるのだ」と言うわけです。歴史社会のなかで神が働くということ、これも当時の私には衝撃的なことでした。

いろいろ心配かけていた佐賀の父母にも、このことを知らせてやろうと思ったのです。特に父などは、「死んだら何もない」とか、口走るような人でしたから、「そんなことはない、死んでも魂は生きているものだ」と、知らせてやりたかったのです。実家にその本、全十二巻を送りました。すると間抜けな話ですが、この大本教という宗教は、僕の母方の祖父が信仰していた宗教だったのです。祖父は佐賀県有田町に住んでいました。佐賀地区の大本の有力信者で、王仁三郎は三回も母の実家に来ていました。

祖父は、私が幼稚園生のころ、昭和二十七年に

亡くなりました。祖父があまりに信仰熱心で、祭典毎に大勢の信者さんたちがやって来たり、祖母は裏方など大変だったことなどもあったのでしよう、祖父の昇天とともに、大本からは離れたのです。しかし神棚はそのままでしたし、朝夕の礼拝は、大本式でやっていたわけです。母の実家ですから、学校の休みのときに長期滞在することも多かったのですが、なんと私は大本の祝詞はすでに知っていたのです。大本教団ということは知らなかったのですが。

大本教団に 大学に残っても、宗教的実感も培えないわけで、哲学もなにもできないのではないのか。そう考えてくると、大学にも残れない。普通の就職もできない。

追いつめられるようにして、神さまに会いにゆくと言いつつ、綾部にある弥仙山という大本の神山に籠ろうと思つたのですが、なまじ霊界や憑霊のことなどを知り始めていたので、今度は「変な霊などがやってくるかもしれない」と、それが怖いのですね。

私のことを心配した叔父（母の実家の当主が、祖父死後も時折連絡のあった大本の役員さんへの紹介名刺を私に渡していたのです。それを持つて教団にゆくと、「久富三六（祖父）さんの孫か」ということで歓迎され、出口栄二さんとも会い、いろんなことがありましたが、栄二さんの娘と結婚することになります。その結婚も、予言されていたようで、そうなるものかな……と思つたものです。それで結婚して、明後日で三十年なのです。大本教団に入ってみると、ほんとに因縁めいた話の多い世界なのです。がんじがらめだなと思つていました。

義父の出口栄二は、私と同じ佐賀出身でした。

彼が願掛けしてお詣りしていた佐賀の神社には、私も以前からお詣りしていました。

出口栄二は、戦後宗教者の平和運動家としては、王仁三郎夫妻の薫陶をうけて、最先端を走つた人ですが、教団内で平和運動への弾圧があり、昭和三十七年以降は、長いこと蔭になつていられる人です。

教団改革運動へ 宗教というのは、手あかがついたような言葉になつていて、いろんなイメージがありますね。

ここ大倭で、矢追日聖法主に会つたときも、『出口さんは、なんで宗教などに入つていなの？』というような事を問われました。王仁三郎も、大本は宗教ではない、と言つたり、宗教不要の理想へとか、辛辣に宗教批判を行つています。

なぜ宗教が批判対象になるのかというと、喩えていえば、きれいなお月さまを指さしている指が既成宗教なのですね。いろんな指があるわけで、大本もあれば、カトリックがあったり、天理教があったり、この大倭もその指の一つだと思つています。大事なものは、指が指し示すものなのです。矢追法主が指さしている先、王仁三郎が指さしている先が、すばらしいと感じるから、その指にも関わるわけです。

しかしその指には、時代性があり、地域性がある。大本の教えは、日本語で書かれているし、明治 大正期の文体です。また当時の歴史社会の制約から、大本の場合には、天皇制と絡むものが多くなつていいる。そこで、そんな指にこだわつて、王仁三郎は右翼的なことを言つていいるとか批判批評しても、それは指の品評であり、指の先に示されたものを見ることにはならない。

しかし教団では、指にこだわり、指さされたものが判らなくなりがちなのです。その指も、教

団の原点、原典は柵に上げ、都合のいい教義教学で自閉してゆく。時代や地域を越えて指さされてきたものの探究などは、なされなくなる。

宗教として、何を指さしているかということよりも、組織やその組織に属していることが、重要なこととされてゆく。組織について異論を出すと、悪魔扱いになる。信者さんたち、みないい人なんだけど、真木さんのお話にあつた「関係の絶対性」というのか、異論をいう人に対して、そのいい人達が壁を作る。

いろんな組織で陥りやすいことですが、中央執行委員会とかに権力が集中し、組織護持のありふれた団体になってしまう。内容よりも、組織そのものが大事になってしまう。指さす月ではなく、指そのものを見る。その教団が志向しているものではなく、教団や教主、その教師たちを見ることだが、信仰者であり、組織員ということになるのですね。

大本も、そんな教団になってしまったのか……と、大本に入って六年目くらいるとき、先輩や仲間と一緒に、教団改革を始めることになったわけです。教団職員を辞め、王仁三郎の教えを学び広めるために、仲間とともに、また私なりのスタンスで、活動してゆくことになりました。

スサノオとヤマタオロチ 真木さんの先ほどの話のなかで、ヤマタオロチのことがでてきました。が、大本でもヤマタオロチ神話は、大きなウエイトを占めています。大本の根本教典である『靈界物語』も、記紀神話にあるスサノオのヤマタオロチ退治談の王仁三郎版ともいえるものです。

しかし、そのなかでは、ヤマタオロチは悪の巨頭とされています。

スサノオは天津神系で、ヤマタオロチを押し込

めた方になります。しかし、スサノオもアマテラスに圧迫されたという屈折した天津神で、押し込められた国津神の体験と通うものをもっています。複雑な性格をもっているスサノオです。

そのスサノオを主人公とした、全八十一巻八十三冊の『靈界物語』の中心テーマは、「つながり」の回復ということでした。

神と人、自然と人、人と人の間が切れてしまつた。そのつながりを、いかに回復するかということが、テーマとなっています。

王仁三郎のいう「人類」は「人群万類」のことです。山河草木、禽獣虫魚に、神の息吹がこもつていてと見ます。人類的なつながりのなかで生命は活性化してゆくの、なぜそれが切れてしまつたか。それを回復するために、大本教団が生まれ、スサノオ的な働きに着目がなされていったわけですね。

その際、王仁三郎の神話のなかでは、ヤマタオロチは、人群万類のつながりを切ってしまった方の役割になっていて、真木さんの話のなかのヤマタオロチとは違って、ここではひとつのコード表現、役割表現だと理解してください。

われよし つよいものがちの弊 出口直の手を通してだされた筆先に、「今は悪魔の世、われよし つよいものがちの世になりておるぞよ」という表現があります。「われよし」「つよいものがち」という表現に、出口直の文明批判が籠められているわけです。出口王仁三郎は、直のその文明批判を、『靈界物語』という教典のなかで展開してゆく。

「われよし」というのは、「何々である」という自己閉鎖に温床をもつとみるわけです。「こうなのだ」との決めつけです。宇宙は、このように

科学的に解明できるのだと決めつけ、閉鎖する。そうすると、それ以外のことには、戸が開かれなくなる。

「なにになのである」というのは、とても傲慢なことになるのです。デカルト以来、人間が中心となつて、自然観も乏しいものになってきた。動物も豊かな生命をもっているのに、人間が利用する物として、決めつけてきた。自然破壊、環境問題などもでてくるわけですが、その淵源となっているのが、「われよし」であり、そこから出てくる「何々である」という閉鎖です。

『靈界物語』は、おもしろおかしく、ドラマ仕立てで書かれているのですが、読んでいて、そんなことに気づかされてゆきます。

ヤマタオロチのもう一つの側面「つよいものがち」は、「何々すべし」という言葉で、私たちのなかにあらわれてきます。

そして、言葉は、いのちを表現する媒体やら触媒であればいいのですが、いのちの大海から切れた形となつて人を動かしてゆくことにもなります。

「ある」「べし」は、ともに、究極的なものを擬制しますね。「ある」は法則性を神とし、科学も宗教になつてしまふ。「べし」は力を神とし、本来の神的世界から人を閉ざしてゆくことになつてゆく。

そんな「われよし、つよいものがち」「ある、べし」の世界にはまつた人間は、結局、根源の神的生命と切れた世界にいるわけで、行き着く先は、孤独の世界なのですね。いのちから切れた言葉を神としているわけですから。

切り離され、つながりがなくなつてしまふ。合理的で、力にみちた社会で、元氣いっぱいという外見ですが、実際は根っこで、宇宙的な生命との

つながりを拒否しているわけです。そのつながりを回復する使命というか、それを背負って出てきたのが、スサノオであるし、歴史的には、出口王仁三郎のやったことになってくるわけです。

スサノオの働き スサノオは、高天原で「乱暴狼藉」を行い、アマテラスに追放されてゆきます。解釈はいろいろあると思いますが、できあがり、少しは硬化していたらうアマテラス文明社会への造反ですね。それが王仁三郎の場合には、明治以降のアマテラス国家への独自のスタンスとなり、二度にわたる国家弾圧を受けることにも相応してきます。

当時の現人神^{あらひとがみ}天皇制、「ある」「べし」の権化ですよね、それを揺さぶったわけです。

それは、王仁三郎の信仰からして、揺さぶらざるを得なかったわけですね。懸かってくるスサノオという神霊も、先ほど来のように、当然霊界から督促するし、させてきます。出口直に懸かってきた良（うしとら）金神も、「今の世は悪の世」と、明治二十二年の明治憲法の成立を見澄ましたように、明治二十五年に出て、厳しく体制を批判する。その筆先で、大正十年の第一次弾圧事件が起こり、不敬罪。

そして、昭和十年に第二次の弾圧事件となりました。富の再分配は、三徳を兼備した天皇によってなされるのだ……と、天皇を国民への富の再分配の原理として最大限に重要視した、「皇道経済論」を王仁三郎は展開しました。

貨幣もいらない、税金はない、天産物自給体制となり、エネルギーも大気中から無限にとれるとか、みろくの世という地上天国の一種の具体的イメージ化ですが、今後、人間の叡智が結集されて

ゆくならば、そうあってほしい社会像になっています。

そんな社会改革案を示し、「理想天皇」を押し立て、当時七百万人のシンパを集めたわけです。当時の日本国民の割ですね。天皇陛下万歳で、それをやったわけです。軍人や右翼も大勢参加してゆきます。すごい勢いだっただけです。

満州事変後の十五年戦争突入のころですし、当然、為政者がいい顔をしなのは、王仁三郎も承知しています。承知しながらやるわけですね。

昭和十年十二月八日に大弾圧が始まっていったのですが、私は、スサノオ的に王仁三郎は当時の絶対天皇制を揺すぶっていったと思っています。

王仁三郎は、当時の帝国憲法下の天皇制を崩さないで、日本人にほんとうの「神」がとりもどせないと思っただけですね。

王仁三郎に言わせれば、弾圧を受けたことで、戦争協力をする必要もなく、教えが貫けたのだというわけで、それもその通りなのです。スサノオ的なやり方なのでしょう。

コトタマ（言霊）の幸 スサノオは歌の神で、コトタマをいのちとしています。コトタマとはなにかというと、それは「ある」とか「べし」とかいう言葉以前の世界です。それは「野生」の叫びみたいなものともいえます。「ある」「べし」という自意識を超えて、一人一人を活かしている叫びみたいなもの、それが宇宙につながってゆくと考えるわけです。

アオウエイという母音が、私たちの意識の底に、大きな海のようにあることを王仁三郎はいいます。その豊かな母音で、コトタマの宇宙に繋がっているわけです。その母音の宇宙に、カサタナハマヤラワ行の子音が組み合わされて、彩りも生ま

れ、意味も生まれてゆく。そこで動いているコトタマは、「ある」「べし」のように、いのちや宇宙とのつながりが切れていくようなものではなく、いのちそのものの動きであるというわけです。

人間は、そのコトタマを内包する袋みたいものですから、人はすべからず、内なる声を出せというわけです。そこで、教典を音読をさせて、そこに籠められたコトタマに同調させようとする。祝詞といって、大きな声で発声する。書かれている祝詞の意味はわからなくても、発声すること自体に、いのちにふれるものがある。

人間は万物の霊長といわれていますが、「ある」「べし」レベルではなくて、もつと霊的共同体というのか、コトタマの深さのなかで、働きむすびあう、その道を探ることが必要ではないでしょうか。大倭の法主さんは、「むずかしいことあらへん、仲よくしたらいい」といわれますね。私などは、理屈っぽく、ややこしく言ってしまうのですが、法主さんの言葉に、そうだな……と、思うのです。

（出口の感想の言葉から）

○こういう場に参加させていただいて、みなさんの話を聞き、その話が自分の中に入ってきて、開かれてゆく。ありがたいなと思いつつ、昨日からいろいろ聞いていました。

○私もいろいろしゃべりましたが、自分でしゃべりながら聞いていました。面白いなあと思って聞いていた。聞くということは、もつと深めていかなければならないと思っています。

* * * * *

神無月神たち集いし大倭

光熱澄みて時空の邑にあり

花野なす朋のいのちの声に聞き

こもれる魂魄の地をたずねて(十九)
 たちばなの
橋
 逸勢
 兼田 隆

平安時代に藤原氏の陰謀、謀略によって承和の変(八四二年)にまきこまれ、伊豆配流の途中に憤死した橋逸勢の墓所が、静岡県三ヶ日町の橋神社(写真)にあります。

橋逸勢は橋諸兄の血を引き、高名な書家として空海、嵯峨天皇と並び、「三筆」の一人として評されます。

現在、京都の上御霊神社や下御霊神社、奈良の御霊神社には、菅原道真や早良親王等と共に橋逸勢は八所御霊神として祭られています。



八所御霊神とは、凶作や疾病など大きな災いが起こると、それは無念を抱いて亡くなった、早良親王、井上皇后、他戸親王、藤原広嗣、文屋宮田麻呂、菅原道真、吉備真備、橋逸勢(諸説として伊予親王、藤原吉子、藤原仲成の内から

の組み合わせもある)の怨霊がもたらしているものだと、朝廷をはじめ都の人々は信じており、八人の御霊を慰めるためにこれらの神社を建立して祭ったものだと言われています。

京都市中京区(姉小路通り堀川東入ル)には、橋逸勢邸跡の石碑があります。この場所を離れる橋逸勢の無念は計り知れません。

御霊神社を建立して御霊神として祭り、怨霊の存在をいちばん恐れていたのは、他ならぬ時の権力者たちだったのかもしれない。

時の波蕩(その十)

熊野 吉野へ

林 修 三

夏、八月十四日、久しぶりで友人の溝口省吾君と、快晴の熊野の山にわけ入った。「世界遺産」認定の後遺症は、思ったよりも熊野の山々に深く、この先増々深くなるとの感を強くいただいた。世界的な利権集団の、美名に隠れた自然破壊は正に神をも恐れぬものであった。

すでに神は映像を以つての山崩れの姿を見せて、人々に最後の警告を与えているのだが……。

「笹の滝」には神の息吹が溢れ、熊野三山の奥の院「玉置山」の古代杉や岩々には、まだ多くの神霊の息づかいが聞こえる。しかし、それももう危ういかもしれない。それ程、人の業は深く、神への冒流は続いている。

今回の小旅行の最終目的地となった丹生川上社から、川底の旧社地を遠望した私達は、その有様に居ても立ってもいられなくなり、何度もの試行錯誤の末、日暮れ直前の旧社地を訪れた。

得体の知れない哀しみに彩られた旧社地の、今は切り株だけになった三本の御神木の前で、祈り

を捧げ、おわびをし、「くにのもと」を唄った。しかし、哀しみは一滴の雨水にもならず、龍神の感応は現象としては現れる事はなかった。馴染みになってしまった虚無感、一種の安堵感と達成感、それに一抹のさみしさを胸に、夜の帳がおりた熊野の山々を後にした。

翌日の明け方、岸和田の溝口家に泊っていたとき、眠りについていたら私は、意識の内では熊野の龍神様の事を思った。刹那、屋根をたく大粒の雨、突風、つづいて一発の雷鳴が響き渡った。身を起こし、暗闇の中で意識下から浮かび上がってくる言葉を確認した。

はからずも六十年目の大倭立教開宣のこの日、感応はあったのである。

心を磨くべし
 汝がころ
 我ら龍神がころ
 通ず
 汝がころ
 くもるとき
 我らが おもい
 通ぜず
 汝がころ
 法主がころ
 我ら龍人がころ
 皆一つ なれば
 ころくもる時
 我らが
 おもい
 むなし
 心 みがくべし

この時、大いなる虚無感は、大いなる風となつた。

こだまことだま 水害ボランティア日記抄

福井市 齋藤 正 宏

◆7月26日(月) 幸いにも、私の親戚はどこにも被害を受けなかったのですが、友人の親戚などには、特に古くからの越前和紙や漆器の産地である今立^{いまだて} 河和田^{かわわだ}地区は、土石流による甚大な被害を受け、家を失った人や、長年続けてきた家業を手放すしかないような人たちが出ているようです。

また奇しくもというべきか、洪水被害が発生した7月18日は、焼夷弾が福井市全域をなめ尽くした大空襲の日でもありました。

今回ほとんど被災しなかった私の近隣地区では豪雨災害の衝撃も早、薄らぎ始めているようです。かつての何回もの災害からの復興を記念する「フエニックスまつり」こそ中止となりましたが、大型ショッピングセンターやパチンコ店では、普段とかわらず夜遅くまで満杯状態の自動車を照らしていますし、こう書いている私だって同じようなものです。しかしその一方で、被災地で手伝えることはないかという気持ちもあるのです。

災害復旧ボランティアとして私にできることは小さいし、どういった「縁」もしくは「関係」があるのかという距離感のようなものが私の中にあるのも事実ですが、仕事である塾の夏期勉強会の準備や入院中の家人のことも何とか段取りがつけられたので、とにかく今日から被災地に出かけてみることにしました。

今日訪れたのは今立地区の民家で床上まで浸水したお宅でした。一緒に作業にあたったのは、「かつてお世話になったから」と神戸からやってきた人。「うちとこが大変なことになったときには頼むで」と原発や地震の問題を抱える静岡 名

古屋地域から出かけてきた人たち。「ナホトカ号のときにはお世話になったからな」と越前海岸からやってきたおばちゃんたち。親子連れや学生さん、ボランティアのために休暇をもらって帰郷してきた青年、他の自治体から自主的に応援に来た人たち。それに私のようなブー太郎あがり？のよな連中と実に様々な顔ぶれ。もちろん初対面の人たちばかりです。そして目の前には、水の流れに押し流されてひっくり返った物置や道具類、床板をはがされた床下にはひび割れた泥の層……。できることから少しずつアイディアを出し合い、手分けして作業を進めていくしかありません。

ボランティアという言葉にはいまだに信じない私ですが、悲惨さを声高に叫んだり、ヒロイックになるのではなく、とりあえずはその中に身を置いてみることで何かを感じようとしているのだと思います。ボランティア参加者それぞれが抱いている想いは様々でしょうが、阪神淡路大震災以降のこの国では「お金中心の価値観を度外視した行為のやりとり」が生まれ育ち始めていることを、少しは信じててもよいような感じがしてきました。

夜は、勝山市まで出かけて塾という組み合わせなので、力まずに1日おき程度で関わってゆこうと思っっています。

◆7月28日(水) 明日は、足羽川の直撃を受けた美山町に入ってみようかと思っっています。先メールでお伝えしたのは、ボランティアの受け入れから情報公開まで上手に立ち上げられた地域への参加でした(地域や行政によつてはこのあたりがうまくできなかったり、閉鎖的で外部からの支援をうまく取り込めない地域もあるようです)ので、作業の進み具合も順調でしたし、比較

的軽作業で済んだわけですが、奥地で現在も交通手段の復旧が住んでいない町の場合は全く様相が異なると思うんです。

7月29日(木) 災害発生から10日もたつと、各地に駆けつける人たちの数やボランティア活動の立ち上がり状況もかなりのものとなります。本日は民 官が垣根を越えて力を合わせればこんなことができるんだという見本のようなもんですね。

8月1日(日) 今日派遣先は美山町最奥の地、折立でした。今日のお宅が受けた被害は、農業機械、住宅関連、その他、総額で3千万円ほどになるとか。おじいちゃん達と息子さん夫婦2世帯で少しずつ揃えてきたものなのでしようが、みんな川にもつてかれてしまったようです。「ここだつて水害のない土地じゃあないんだ。わしが生まれてからでも4回は経験しておる。しかしモノを持ってなかつた昔は身ひとつで逃げるだけよかつたんじや。モノを持つようになつたから被害も増えるんじやのお……」とおじいちゃん。

8月3日(火) 今日をもって美山町ボランティアセンターの活動は終了しました。昨日まで入っていた現場の感じではまだまだお手伝いできるところがあるようなのに、なぜボランティアの受け入れを止めてしまうのでしょうか。2週間の手作業によって重機が入れるようになったということもありますし、復旧作業が大工さんたち専門家中心の段階に入ったのも事実です。また連日のボランティア受け入れで疲れ切つているので、地元の人たちもそろそろ一休みしたいということもあるのでしょうか……。どこか釈然としない感じでしたが、最後まで現場の手伝いに出かけることにしました。

今回の災害で一番活躍したのが中高生だったという印象があります。炎天下で黙々とスコップを握り、一輪車を押し、水を撒き、タオルや軍手、

梅干しを配って歩いていた彼ら。帰りがけに一緒にした先生達のいうように、復旧活動がちょうど夏休みの始まりに重なったということもあるでしょうし、そうしようと思った先生たちを中心に学級単位やクラブ単位での有志参加だったというのも本当のところでしょう。それでも実際に被災地を訪れ、その惨状を五感を通して感じ、また全国から集まってきた膨大な数の夕夕働きする大人たちを見て、彼らなりに言葉や理屈を越えた何かを感じとってくれたからこそ、あの動きが出てきたように思います。この夏、人間として一番勉強したのは、大人達よりも彼（女）らだと思います。

◆8月6日（金）ここ数日、昼は美山町、夜は勝山市まで仕事に通うという毎日でしたので、かなりくたびれました。災害ボランティアって何だったのか？ その答えは一人ひとり異なるだろうし、ボランティアの有り様そのものだって刻々変化。深化？をとげているようです。まあ、被災者にとっても、ボランティアに来る人にとっても、またスタッフで迎える人にとっても、壮大な課題だったといったら、決めすぎでしょうか？

今朝 ある個人から一通のメールが届いておりました。「美山町の農業ボランティアに来てくれないか？」今度は、田んぼの水回りを取り戻すお手伝いらしい。土砂の下敷きになってしまった田畑も多く見かけたけれど、なんとか持ちこたえているような田畑もかなり見かけたものです。

プツンと糸が切れたような感じで終わった美山町ボランティアでしたが、田舎には田舎のペースでの復興があるでしょう。田舎型ボランティアが、稲を救うことで起ちあがる。そんな風を受け取ってしまう私は、明日も美山町の田んぼに出かけるのでしょうか。

逍遙遊を求めて……

竹内高明さんの巻

李 章 根

これは、チエルノブイリ原発事故後の処理にあたった、ある消防士の妻の証言である。

「病院での最後の二日間は、私が彼の手を持ちあげると骨がぐらぐら、ぶらぶらと揺れていた。骨と体が離れたんです。肺や肝臓のかげらが口から出てきた。夫は、自分の内臓で窒息しそうになっていた。私は手に包帯をぐるぐる巻きつけ、彼の口につっこんで全部かき出す。ああ、とても言葉では言えません。全部私の愛した人、私の大好きな人」「四時間後に娘の死が告げられた。そしてまたです、娘を私に渡さないという。渡さないってどういう事？ 私の方こそ、この子をあなた達に渡すもんですか！ 科学のために娘を取りあげるつもりね！ 私はあなた達の科学なんて大嫌い。憎んでいるわ！ 科学は最初に夫を奪い、今度は娘まで……。渡すもんですか！ 自分で埋葬してやりませう。夫の隣に」

「彼らは死んでいきますが、誰も彼らの話を真剣に聞いてみようとしません。私達が体験した事や死については、人々は耳を傾けるのを嫌がる。恐ろしい事については、でも、私があなたにお話したのは愛について。私がどんなに愛していたか、お話ししたんです」（『チエルノブイリの祈り』スベトラーナ アレクシエービッチ著 岩波書店）

チエルノブイリ原発事故が起きてから早や十八年の月日が経った。あれは一九八六年四月二十六日午前一時二十三分五十八秒の事だった。この爆発事故は世界にショックを与え、以後現在に至るまで大地に人間に甚大な被害をもたらしている。

今年七月十七日、以前大倭で三年間暮らした事のある竹内高明さんが来邑。夜の九時からだった二十数名の人が大倭会館に集った。

現在ウクライナ在住。チエルノブイリ事故後長期的支援を続けている、NPO「チエルノブイリ救援 中部」という団体の駐在員として働き、又現地を訪れる他団体の通訳もしている。竹内さんは静かに語りつつも、話される内容は知的でユーモラスだった。大倭にあった頃の野草社を止めてからは、豊橋の自然食レストランや古本屋で働き、後NGO職員海外研修プログラムに応募し二年間キエフ大学に留学。その後、現地の外語大の日本語教員となり、六年間勤め現在に至る。

竹内さんの話では、事故後放射線汚染による免疫力低下で、様々な病に侵される人が多い。又、ソ連崩壊後のインフレによって、物心両面において人々は厳しい状態だという。日本での一般募金もかなり減り、危機感を持つているらしい。「長くウクライナにいる理由は？」の質問に、竹内さんは「人が面白い、親切でやさしい人々がいる、まあそれに甘えてはいけないうですけれどね」と恥ずかしそうに言われた。また大倭の印象では、「なんでもかわからないのだけど、大倭にはお世話になったという思いがあるんです」という。

僕にはこの二つの感想は印象的だった。支援している、されているという一方向的関係ではない、人間の関係がそこに在るように思えた。

その夜は、実に大らかな雰囲気漂っていた。またの再会を待ち望みたいと思う。

* * *

NPO「チエルノブイリ救援・中部」

名古屋市昭和区桑園町一三七〇

TEL/FAX 〇五一一八三六一〇七三

http://www.chemistry-chubu-jp.org

あじさい日誌

9月10日 本紙の李章根編集部員が5日からの中国旅行よりこの日深夜に戻りました。

李さんの話「1986年の春以来の中国旅行でした。あの年は、チエリノブイリ原発事故がありました。激しい米ソの軍拡競争により、中学生の頃から僕は原子力や戦争を恐れていました。中国のホテルで泣き叫びながら走り去ったソ連の女性を眺めながら、「とうとう起こってしまっただか」と茫然としていた事を思い出します。

今回は急遽、友人に同行する形で、北京 天津に行く18年振りの中国でした。天津では中国人の友人の紹介で、3人の老武術家にお会いでき、ライブヒストリーの記録現場に居合わせることができました。老師と弟子達の関係には何ら遠慮はなく、言いたいことを言い議論していま

した。自分の伝えたい事ははっきり伝え、感情表現を豊かにし合う様子は、この旅を通じて最も印象に残ったことでした。みんなパワーありましたわー！。

9月11日 交流の家で、今夏の日韓合同ワークキャンプの反省会が行われました。慶尚南道河東郡にあるハンセン病回復者の定着村で行われ、日本から38人、韓国から70人が参加したとのこと。

9月12日 埼玉県熊谷市の飯塚公子さんが来邑されました。午後、視会。振霊の行をテーマに話し合いました。夕方から教務本庁で勉強会。

9月15日 大倭神宮月次祭。昭和9（1931）年9月15日の大倭神宮月次祭のことが書かれている『やわらぎの黙示』31頁の「神慮に国境なし」を林修三さんが朗読しました。

9月19日、20日 四国の崇徳天皇陵、屋島を杉本順一一家と山崎正知 波留茂夫妻、藤田啓子さんが訪ねたそうです。

9月22日 大倭印刷では巨大ナメクジ出現に皆びっくりにして見物、写真まで撮りました。数日後、もう一匹いた時にはもう知らん顔でした。

9月23日 大倭大本宮月次祭。

9月24日 本紙編集会議。ちょうど大倭出版局初代編集長でもあった故柴地則之さんの帰幽満15年の命日なので黙祷して会議を始めました。

9月28日、29日 台風で中止になった安宿苑夏祭りの時の寄付品がたたくさんあったため、あじさいの箱が大倭会館でバザーを行いました。

10月3日 大倭町自治会のレクリエーションで三重県長島の「なばなの里」に行きました。花の名所ですが、台風後で荒れていて今いち。昇ちゃんだけは安宿苑の寮母さん二人に付きっきりで両手に花だったかな。

10月6日 大倭神宮月次祭。夜、邑倭の会。

10月10日 京都府船井郡の太田修 美樹子夫妻と奈那ちゃん（10歳）が来邑されました。

午後、視会。秋の一滴文化行事の勉強会が行われ大勢が参加しました。

その後、教務本庁で勉強会。

大倭安宿苑では（菅原園）9月14日、15日 USJと神戸クルーズングへの1泊2日の旅行を楽しみました。

（須加宮寮）9月30日 色々工夫した種目で室内運動会を楽しみました。（長曾根寮）9月20日 あじさい広場にてご馳走や演芸で敬老の集い。八重垣園からの参加もあり130名の利用者が一堂に会しました。恒例の福引大会が大人気。（八重垣園）9月29日 俳句クラブ。「敬老の日頃の成果披露し」「秋茄子や度々膳に顔を出し」「乗り越して一駅もどる法師蟬」

《おんぼ通信》 脱穀と収穫祭のご案内

11月7日（日）10時から田んぼで脱穀をした後、大倭会館で昼食（こちらでご用意）。

11月23日（祝）新しいお米で拝殿にお餅をお供えした後、12時より大倭会館で昼食会（赤飯）をします。

どうぞどなたでもご参加下さい。

双葉館
TEL 0742-41-4615

第11回 備中神楽

今年も岡山から神楽を呼びます。ご家族で伝統芸能をお楽しみ下さい。

とき 平成16年11月27日（土）
午後6時半～8時半

ところ 大倭拝殿

演目 猿田彦の舞
松ノ尾一さん
八またのオロチの舞 他

出演 岡山県備中神楽成羽保存会

入場料 無料（花代大歓迎）

世話人 湯浅晴子 平谷照子
有志一同

お問合せ TEL 0742-48-3389

第16回 大倭会文化講演会

講師 成瀬匡章氏

テーマ 「古代人の水と森への想い」

— 吉野 宮の平遺跡発掘にかかわって —

日時 平成16年11月14日（日）午後2時より

場所 大倭紫陽花邑 拝殿

※ 講演会終了後、大倭会館にて懇親会（懇親会会費1,000円）

入場無料

講師プロフィール

三重県出身。4年前、宮の平遺跡の発掘調査に参加して奈良県吉野郡川上村に滞在した。大学では日本古代史を専攻。山で生活する人の生活、文化、宗教観などに関心があり博物館の仕事がしたかったと言う。現在、川上村の「森と水の源流館」職員。

あんない

* 月次祭（大倭神宮）
11月6日（土） 午後2時より
大倭神宮にて。

* 大倭会主催第四三三回視会
11月14日（日） 文化講演会として行われます。詳しくは右欄をご覧ください。

* 月次祭（大倭神宮）
11月15日（月） 午後2時より
大倭神宮にて。

* 月次祭（大倭大本宮）
11月23日（祝） 午後2時より
大倭大本宮拝殿にて。